

# ジュリアンによる『孟子』受容初探

佐藤麻衣

## はじめに

本研究は、清代のイエズス会士によってヨーロッパ社会に強い影響をもたらした中国哲学の情報伝播に着目し、『孟子』の思想がどのように受容され、当時の思潮に具体的変動を引き起こしたのか考察することを目的とする。

ところで、筆者はこれまでに『日本中国学会報』第六十六集所載の拙稿「張居正『孟子』解釈とヨーロッパにおける受容について」と、『中国文化』第七十三号所載の拙稿「プリュケによる『孟子』受容とその特徴について」で、従来気づかれなかった張居正の思想の一端を抽出し、その思想的傾向がプリュケ『孟子』訳文において意図的な「人名・数字の修正」さえも誘発させるものだった可能性のあることを発見した。もし、フランス革命に対する『孟子』の遠隔的影響があったとするならば、特にプリュケの修正の場合、それは『孟子』の革命思想を積極的に肯定は認する作業に連動し、ルイ王政に対するプリュケ自身の批判的観点が投影されている可能性が高い。そして、筆者は拙稿「プリュケによる『孟子』受容とその特徴について」の「まとめ」において、このような性格を内包したプリュケ著書がフランス革命直前に出版されていることから、『孟子』の思想がフランス革命前後の知識人たちに受容された可能性のあることの究明を次なる課題として提示した。

そこで、本稿では、コレージュ・ド・フランスの中国学講座初代教授のアベル・レミュザ(一七八八～一八三二)の弟子であり、シノロジーにもつながるスタンニラス・ジュリアン(一七九七～一八七三)の『孟子』訳<sup>(1)</sup>について、若干の検討を試みたいと思う。フランス革命後の『孟子』訳を確認することで、プリュケによる『孟子』受容とその特徴が、フランス革命に流入したであろう可能性を探るための初歩的作業とする。

本稿では、『孟子』訳において、これまでの拙稿の内容と特に関連する「梁恵王下」の章を取り上げたいと思う<sup>(2)</sup>。また、ジュリアン『孟子』訳は、ほぼ漢文の語順に従ったラテン語の逐語的『孟子』原文訳と、さらに彼自身による

注釈が加えられている。そのため、本稿では、『孟子』原文訳について必要箇所を押さえつつ、彼自身による注釈の内容に着目することで、ジュリアンの『孟子』理解と受容を基礎的に概観してみたいと思う<sup>(3)</sup>。

## 一. 『孟子』「梁惠王下」におけるジュリアンの原文訳

まず、『孟子』「梁惠王下」の本文を示す。

齊宣王問曰、湯放桀、武王伐紂。有諸。孟子對曰、於傳有之。曰、臣弑其君可乎。曰、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。殘賊之人、謂之一夫。聞誅一夫紂矣。未聞弑君也。(『孟子』梁惠王下)

この章は、前述した拙稿においてすでに確認してきたように、プリュケ(一七一六～一七九〇)による「文王・武王の主語の置換」が一番最初に確認できる箇所であり、『孟子』における革命是認の重要な部分である。ジュリアンが、この部分をどのように解釈しているのか、注目すべきところである。

以下、この部分のジュリアンによる『孟子』原文訳を示す。ちなみに、ジュリアン『孟子』原文訳における表記に関して、( ) はジュリアン自身による挿入、[ ] は訳者による挿入、〈 〉 は訳者による他の訳となるので、注意されたい。

齊国の王である宣王 Siouan wang が質問して言った「私は、湯王 *regulus Thang* が帝王桀 Kie を配所へ送り、そして武王 Wou wang が帝王紂 Tcheou を攻撃した〈戦争を始めた〉 *armis-aggressum-esse* と聞いたが、それは本当に起きたのか」と。孟子が答えて言った「歴史〈史書〉 *historia* においてそれは起こった」と。王が言った「まさか臣下に自身の君主を殺す *occidere* ことが許されているのか」と。孟子が言った「あの人間性〔仁〕 *huamanitas* に強奪をなす〔賊う〕 *Ille qui furtum-facit huamanitati* (i. e. *lædit humanitatem*) 者は略奪者〔賊〕 *praedo* と呼び、あの公正〔義〕 *aequitas* に強奪をなす者は極悪無道の男〔殘〕 *vir-nefarius* と呼ぶ。ところで、略奪者でそのうえ同時に極悪無道の男は、一人の *solus* (すなわち私人の *privatus*) 人〔一夫〕と呼ぶ。私は、確かに湯王 *regulus Thhang* が、紂 Tcheou という名の、一私人としての男 *unus homo-privatus* を殺したことは聞いたが、臣下の湯 *Thhang* が彼自身の君主を滅ぼしたということは、まだ聞いたことがない」と。(ジュリアン『孟子』訳上巻、六十九頁、原文訳)

上述したように、ジュリアン『孟子』訳は、ほぼ漢文の語順に即したラテン語の逐語訳になっているため、『孟子』原文により一層密接した訳文である。

そのため、ジュリアン自身の固有の解釈は、その「注釈」に現れている傾向がある。

## 二. 『孟子』「梁恵王下」におけるジュリアンの注釈

続いて、彼自身による注釈の内容を確認しながら、ジュリアンの『孟子』解釈について考察する。ちなみに、ジュリアンの注釈における表記に関しては、ジュリアン『孟子』原文訳における表記の場合と同様に、( ) はジュリアン自身による挿入、[ ] は訳者による挿入、〈 〉 は訳者による他の訳となる。

まず、原文の「賊仁者謂之賊」に関し、ジュリアンは、「人民によって長にされた帝王 princeps qui populis praepositus est ならば、彼らに対して、哀れみ駆りたてられるべきであるのに、天から自身に注ぎ込まれた人間性〔仁〕 humanitas の感情を消し去り extinguere、また従属する人々に対して残酷に虐待する」(同上、六十八頁、注釈) ことであると説く。ここでジュリアンの示す「哀れみ misericordia」とは、『孟子』における「不忍人之心」を指している。これは、『孟子』における「惻隱之心」であり、「仁之端」でもある。また、『孟子』「梁恵王上」では、斉の宣王が一牛を惜しんだ際の心について、その王の「忍びざる」すなわち「哀れみ」こそ、王たるに足る心であると『孟子』が述べたものである。ジュリアンは、これら『孟子』の思想や諸解釈を踏まえた上で、ここで「哀れみに応じて駆りたてられるべきである」と示したものとと思われる<sup>(4)</sup>。

一方、「賊義者謂之殘」に関しては、「公正〔義〕を傷つけること *laedere aequitatem* (害義)<sup>(5)</sup> は、[次のことを] 意味している。すなわち、自然本性によって内在化された (*i-lun*, 彝倫<sup>(6)</sup>.〈……〉) における親族関係〈親密な関係〉 *cognatio*、たとえば(彝) 五つの従属関係〔五倫〕 *subordinationes* を転覆させること *subvertere* である。つまり、一、王〈君主〉と家臣〈臣下〉との間。二、両親と子供たちの間。三、年上と年少の兄弟姉妹との間。四、夫と妻の間。五、友人の間(同上、六十九頁、注釈) と説く。ここで示される「五つの従属関係」とは、孟子における「五倫」を指している<sup>(7)</sup>。ただ、「五倫」はその名称と順序が『中庸』と共に議論されるところであり<sup>(8)</sup>、『孟子』が「父子、君臣、夫婦、長幼、朋友」、『中庸』が「君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友」となる。ここでジュリアンを見ると、『孟子』とも『中庸』とも異なる「君臣、親子、兄弟姉妹、夫婦、朋友」となっているのである。ジュリアンが示すこの順序や内容にどのような意味があるのかは、今後検討していく必要があると思われる<sup>(9)</sup>。

次に、「謂之一夫」について、「なぜなら、民衆は彼から遠ざかり desciscere、両親は彼を見捨てて deserere、もはや全帝国 imperium から支配者 dominus と見做されないからである」（同上、六十九頁、注釈）と説く。ジュリアンは『集注』などの解釈により、民衆や両親の心を失った時点で、もはや帝国自体を保有していることにはならないと考えているのだろう<sup>(10)</sup>。

そして、「聞誅一夫紂矣、未聞弑君也」について、「武王 Won wang が帝王 桀 Kie を罰することにおいては、自分の怒り〈憤り〉ira または功名心〈野心〉ambitio からではなく、天 coelum の命令〔天命〕mandatus および民衆の要求に応じたのだ<sup>(11)</sup>。ゴーベル『書経』83 頁を見よ<sup>(12)</sup>」（同上、六十九頁、注釈）と説く。ジュリアン『孟子』原文訳では、先行のプリュケが「武王」の語を「文王」に置き換えた箇所において、類似の仕方でも「武王」から「湯王」に修正していた<sup>(13)</sup>。プリュケによる「武王」から「文王」への置換は、先行者「文王」においてすでに「革命」の意志があったと受け止めさせるための操作であり、延いては「革命」の正当性を強固にする意図があったと思われる。「武王」に「文王」の意志を直結させることは、革命の当事者「武王」の肯定的支持にもつながる。

他方、ジュリアンは「武王」による紂王討伐の正当化のために、遑行させて「湯王」による桀王放逐とオーバーラップさせようとさえしていた。

ここで、歴史年表的な観点から見てみると、プリュケの中国哲学論「儒教大観」を含む訳著『中華帝国経典』が出版されたのは一七八四～八六年で、一般的にフランス革命が勃発したと言われる一七八九年のまさに直前に当たる。一方、ジュリアンの『孟子』訳は一八二四～二六年に出版されており、一八三〇年に起るフランス七月革命の直前である。すなわち、プリュケの出版から約三十八年後のジュリアンの出版当時は、ルイ十八世による王政復古への不満からフランス七月革命へ向かう気運の只中であつたといえることができる。

したがって、中国史において通念化していた「湯王」による「放」が最初の革命だと考えた場合、「武王」による「伐」は次なる革命と捉えられる。

ここでジュリアンの注釈を見ると、「武王」の事蹟に『書経』からの引用文を当てはめている。そこでジュリアンが指示する『書経』の該当箇所当たる章のタイトルを確認すると、「仲虺之誥 TCHONG-HOEI-TCHI-KAO」とある。つまり、その内容は歴史的に遙か遡る「湯王」に関するものだったのである。この章の概要は、湯王が桀を放ち、天子になった後、その徳の至らなさを湯王が恥じたため、仲虺が天命と民心によってその正しさを説明する、というもの

である<sup>(14)</sup>。ジュリアンの『孟子』原文訳では、「紂」が「湯王」に殺されたと述べているが、それは単なるケアレスマスの可能性もある。しかし、それが意図的な記述であったとすれば、ジュリアンが説かんとしたのは、「武王」による次なる革命においても、「湯王」に許されたと同様の正当性が与えられたことを保証する、というものであったのであろう<sup>(15)</sup>。要するに、「湯王」が「紂」を倒したという歴史的に錯誤する表現は、歴史上の事実としてではなく、「湯王」と「武王」に通じる普遍性として、「天命」に裏付けられた「放伐」による「革命」の正当性と、聖人化としての同列化として「湯王から武王への連続性」を示しているように思われるのである。

## まとめ

本稿は、『孟子』「梁恵王下」において、ジュリアンの『孟子』受容に関する若干の検討を試みた。その結果、ジュリアンの『孟子』訳においても、プリュケとよく類似した修正と解釈が存在する可能性を確認できた。

したがって、ジュリアンが参考にしたであろう解釈の理解を含め、ジュリアンの『孟子』受容を具体的に検証することで、プリュケによる『孟子』受容とその特徴が、フランス革命に流入した可能性を探るための一つの手掛かりになると思われるのである。

本稿における初歩的作業から、豊富な資料の下、実証的な証明へと導くことを今後の課題とする。

## 注

(1) Stanislas Julien, *Meng Tseu vel Mencium*, Paris, 1824-29.

ジュリアン『孟子』訳は『孟子』の全訳であり、上巻「梁恵王上～滕文公下」と下巻「離婁上～尽心下」の二巻に分かれ、それぞれ一八二四年と一八二六年に出版されている。加えて、固有名詞一覧表や語彙索引、考察などの補足もある。

(2) 『孟子』の章数は、『孟子集注』の文章によった。

(3) この注釈のために参考にした解釈について、ジュリアンは、「発行者の序言」の中で、膨大な四十以上の集められた解釈の中で、特に八つを利用したと示している。もちろん、基礎資料とされたノエル『中華帝国の六古典』は参照しており、さらに『大全』、『蒙引』、『存疑』などは解釈の前提として示されている。ただし、今回取り上げるジュリアン注における関連解釈については、紙幅の関係上触れられなかった。膨大な解釈利用の、具体的内容や背景等については、稿を改めて考察したい。

(4) 『四書大全』「孟子」梁恵王下に、「〔朱子曰〕……賊仁者無愛心而残忍之謂也。賊義者無羞惡之心之謂也」とある。「梁恵王上」において、斉の宣王が一牛を憐れみ愛

する心は「〔朱子曰〕君子於物愛之而已」（『四書大全』「孟子」梁惠王上）にあたり、また「忍びざる」心であることから、『大全』での「愛心」とはすなわち「惻隱の心」である。

- (5) ジュリアンの注釈には、イタリア人宣教師バジルの漢羅字典『漢字西訳』（一七二六）を用いた番号の挿入がある。本稿に示す訳文では、番号を省略し、対応する漢字のみ表記する。ただ、本稿では、バジル『漢字西訳』に仏訳をつけた、フランス人中国学者ド・ギーニュ（一七一二～一八〇〇）の息子クリスチャン・ルイ・ジョセフ（一七五九～一八四五）による漢仏羅対訳字書『漢字西訳』（一八一三）のみ参照している点を注意されたい。
- (6) ジュリアンの注にある番号「2654-10-138」に関して、「10-138」を「10138」と捉えて引くと、「論」になる。朱子に「害義者、顛倒錯亂、傷敗彝倫」（朱熹『孟子集注』梁惠王下）とあることから、ここは「論 lun」よりも「倫 lun」の方がより適切だと思われる。
- (7) 『四書大全』「孟子」梁惠王下に「〔朱子曰〕……賊仁是將三綱五常天秩之禮一齊壞了。義隨事制宜、賊義只是於此一事、不是更有他事在」とある。恐らくはこの「五常」による解釈と思われるが、それでは「賊仁」における弊害を「賊義」に当てはめたことになる。そのため、この背景にある、ジュリアンが参考にしたであろう膨大な解釈の綿密な検討が必要であり、今後の課題とした。
- (8) 宇野精一『全訳漢文大系 第二巻 孟子』（集英社、一九七三）一八三頁を参照。
- (9) 実は、「五倫」の記載がある『孟子』滕文公上の章には、ジュリアンによる名詞の修正が行われている箇所が存在している。このような修正と共に、読者に「五倫」を注目させる意図があったのか否かについては、後考したい。
- (10) 『四書大全』の輔廣の言に「衆叛親離不復君之」（『四書大全』「孟子」梁惠王下）とあり、朱子に「一夫、言衆叛親離、不復以爲君也」（『孟子集注』梁惠王下）とあり、張居正に「殘賊之人、天命已去、人心已離、只是一箇獨夫、不得爲天下之共主矣」（『孟子直解』梁惠王下）とある。
- (11) 「民衆の要求」とは、ここでは『書経』「仲虺之誥」における「初征自葛。東征西夷怨、南征北狄怨。曰、奚獨後予。攸徂之民、室家相慶、曰、徯予后。后來其蘇。民之戴商、厥惟舊哉」を指していると思われる。ちなみに、湯王に関する表現を武王に使う手法は、張居正『孟子直解』にも見られた。詳しくは拙稿「18世紀西欧における『孟子』「義戦」の受容について」（『筑波哲学』第二十三号、二〇一五）を参照。
- (12) Feu le P.Gaubil, *Le Chou-King*, Paris, 1770.

後藤末雄『中国思想のフランス西漸2』（平凡社、一九六九）二五九頁によれば、ゴービルの翻訳したものを、ド・ギーニュが原書と参照して訳文を訂正し、そこに注釈を加えたものである。

また、酒井智宏訳、石川伊織・井川義次訳注「『書経—中国の一つの聖典』アントワーヌ・ゴービル訳（1770年）—ジョゼフ・ド・ギーニュによる序文—」（ヘーゲル

とオリエント 研究報告書、二〇一二)において、ギーニュの序文には「この書物が、啓蒙された賢明な国家の聖典であるということ、それがその統治の基盤、立法の源泉となっているということ、それを読むことを通じて君主や閣僚が自らを教育する書であるということ、その歴史の最も純粹で最も確かな源であるということ、中国人の聖典のうちで最も重要な書物であるということ、我々が聖書に対して抱くのと同じような敬意と崇拝の念を彼らがこの本に対して抱いているということ、この書物を一文字でも書き換えることさえ彼らには想像できないということ、そして最後に、皇帝たちがこの書物全体を公的業績に刻ませているということ」とある。ギーニュの解釈において、『書経』がいかに権威ある書物として受け止められていたかがわかる。

- (13) 本稿で取り上げる修正箇所以外にも、ジュリアンによる修正は数箇所存在する。特徴として、プリュケは「文・武の置換」のように同一名詞を置換する傾向があったが、ジュリアンは主張内容によって修正する名詞・地名を変えている。また、「文・武の置換」が確認できた同一箇所での修正は「梁恵王下」での一章のみであり、他はプリュケとは異なる箇所で行っている点がある。
- (14) ここで、ギーニュの注釈を見ると、湯王が行った放伐について、『書経』は、そのことが天命によると述べてはいるものの、こうした成湯の行為と、またつづいて武王の行為は、すべての中国人から承認されてはこなかった、と示してある。この「仲虺之誥」章におけるギーニュの注釈によれば、湯王の事績に武王を結びつけ、両者の行動は「天命」のもとで連続的に捉えられていることが記されている。
- (15) 張居正に、「蓋紂自絶于天、故天命武王誅之、為天下除殘賊。吾聞誅一夫紂矣、未聞其為弑君也。觀于武王、則湯之伐桀、亦猶是耳。易曰、湯武革命應乎天而順乎人」(『孟子直解』梁恵王下)とあることを踏まえると、ジュリアンにおいても、天理による革命の必然性の強調や、「湯・武」の聖人化としての同列化の解釈傾向があった張居正『孟子』解釈が影響している可能性がある。

(筑波大学大学院)